

平成21年 4月20日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2005～2008

課題番号：17520057

研究課題名(和文) 社会学年報学派による宗教研究の再検討

研究課題名(英文) Rethinking the religious studies in the school of "l'Année sociologique"

研究代表者

山崎 亮 (YAMAZAKI MAKOTO)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：40191275

研究成果の概要：近代宗教学思想の展開に大きな役割を果たした、デュルケーム、モース、ユベールら社会学年報学派の宗教研究を再検討した。とくに、彼らの共同作業の内実に着目し、当時の社会的・思想的コンテクストをも参照しつつ分析を進めた結果、学派に共通する宗教研究の枠組みが、『社会学年報』のアナリーズ(書評)欄の構成に体现されていること、またユベール、モースとデュルケームの緊密な共同作業に基づく「供犠の本質と機能に関する試論」(1899)の生成過程のなかに、このような共通の枠組みの始点が存在することが明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	500,000	0	500,000
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	0	0	0
年度			
総計	1,600,000	180,000	1,780,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教社会学、宗教人類学、社会学年報学派、デュルケーム、ユベール、モース

1. 研究開始当初の背景

周知のようにエミール・デュルケームは、1898年創刊の『社会学年報(l'Année sociologique)』を拠点として、当時の新進気鋭の若手研究者を糾合し、社会学年報学派と称される研究者グループを組織した。この学派の活動は後の社会学・人類学の展開に大きな影響を及ぼしたが、なかでもデュルケームとモースを中心として繰り広げられた宗教研究は、学派の研究活動において中核的位置を占める

とともに、供犠、呪術、葬送、口承儀礼、トーテミズムやマナイズムといった個々のトピックスについてのみならず、聖俗論の視座の確立、宗教の社会的機能の解明、分類体系や象徴に関わる集合表象論などの方法論的議論において、宗教学の領域にも計り知れない影響を与え続けてきた。社会学年報学派によるそのような宗教研究の成果はしばしば連名で発表され、それらが緊密な共同作業の所産であったことは周知の事実である。

しかしながら、社会学年報学派による宗教研究に関する従来の研究は、マルセル・モースやデュルケームら個々の研究者の業績を個別に取り扱う傾向が強く、その共同作業の内実や、学派による宗教研究の全体像を問う視角はほとんど皆無の状況にある。

本研究の第一の特色は、社会学年報学派の宗教研究の中核がモースとデュルケームの共同作業に基づいていた事実に着目し、その内実を、両者の宗教研究関連の論著、書簡などの精査を通じて具体的に解明しようとする点にある。

他方で私は、デュルケームの主要テキストの内在的な検討作業を通じて、彼の宗教研究の全体像の解明に取り組んできた。それは、宗教の社会的規制機能ないしは統合機能を強調し、あるいはすべての社会制度の胚珠として「原始宗教」を研究する発生論的な宗教研究から、宗教、とりわけ祭祀における集合的沸騰のなかに人間と社会の生の活力源を見出そうとする人間学的な宗教理解への展開として把握される（山崎亮『デュルケーム宗教学思想の研究』未来社、2001年）。

本研究は、以上のような私のデュルケーム宗教論研究の成果を直接の基盤としつつ、その検討作業の範囲を社会学年報学派による宗教研究にまで拡大・深化させようとする試みとして位置づけることができる。

さらに、本研究は、社会学年報学派の宗教研究の意義を再検討することで、同時に宗教研究全般の基本的枠組みの再検討という性格をも併せ持っており、従って、私自身が取り組んでいる現実の宗教現象——とくに宗教民俗を中心とした日本宗教——の実証的研究にも、方法論的・理論的示唆を与えることが大いに期待される。

2. 研究の目的

本研究は、2005（平成17）年度から2008（平成20）年度までの4年間で、19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランス社会学年報学派による宗教研究のあり方を検証し、宗教学の視点からその意義を再検討することを目的としている。

本研究では、社会学年報学派による宗教研究のなかでも、とくに中心的役割を果たしたモースとデュルケームに焦点を合わせ、1)モースとデュルケームによる宗教研究関連テキストの内容を詳細に検討して両者の共同作業の過程を具体的に解明するなかで、社会学年報学派の宗教研究の特徴を浮き彫りにし、2)当時の社会的・思想的コンテクストのなかに社会学年報学派の宗教研究を位置づけ、3)宗

教学説史におけるその意義を再検討する。

3. 研究の方法

(1)デュルケームとモースの宗教研究関連テキスト——論文、書評、書簡など——の精査を通じて、その共同作業の内実を具体的に解明する。

(2)社会学年報学派に関連する学説史上の先行文献、当時のフランスにおける社会的・思想的背景に関連する研究文献、さらにイギリス社会人類学に関連するテキスト・研究文献などを素材として、社会学年報学派の宗教研究に関わるコンテクストを検討する。

(3)研究成果の一端を、学術論文あるいは学会の場で公表し、内外の研究者と意見交換を行って研究の深化・展開を図る。

(4)Fonds Maussに含まれる一次資料の調査を実施し、デュルケームとモースの共同作業の解明に役立てる。

4. 研究成果

(1)2005年度から2006年度にかけて

『社会学年報』全12巻のアナリズ欄における宗教社会学セクションの項目の変遷を、モース、アンリ・ユベール、デュルケームらによる関連文献を渉猟しつつ、詳細に検討した。この結果、宗教的表象（信念）と宗教的实践（儀礼）、社会組織、並びにそれらを包摂する全体的な宗教体系という4つのカテゴリーが、1904年頃から、宗教研究の枠組みとして社会学年報学派に共有されていく過程を解明した。その成果の一端は、学会発表⑥「社会学年報学派の宗教学思想・序説」として、印度学宗教学会第49回学術大会（於大正大、2006.6.10）において口頭で発表し、社会的背景の問題も視野に収めながらその内容を拡充・深化させて雑誌論文④「社会学年報学派の宗教学思想・序説——『社会学年報』宗教社会学セクションの構成を中心に——」（『島根大学教育学部紀要』40、2006.12）として公表している。

この基礎的作業をふまえて、ユベールとモースによる1899年の論文「供犠の本質と機能に関する試論(Essai sur la nature et la fonction du sacrifice)」(以下、「供犠論」と略記する)の生成過程を、モース宛のデュルケームの書簡なども参照しながら検討した。その結果、ユベールとモースの実質上の処女作であるこの論文には、供犠をとらえる基本的な視角などをめぐって、デュルケームによるかなり積極的な関与が存在することが明らかとなった。その成果の一端は、学会発表⑤「ユベール・モース供犠論の生成」として、日本

宗教学会第65回学術大会（於東北大、2006.9.18）にて口頭で発表した。とりわけ、社会学年報学派に共有された宗教研究の枠組みの析出は、内外に例を見ない独創的な研究成果と言い得る。

(2)2007年度

引き続き『社会学年報』の宗教社会学セクションのアナリーズの内容を継時的に分析するとともに、ユベール・モース「供犠論」（1899）の生成過程と、これに対するデュルケームの影響を検討した。また、ノルマンディー地方Caen市近郊に位置するIMEC (l'Institute Mémoires de l'édition contemporaine)に赴き、そこに保管されているFonds Mauss（モース文庫=以前コレージュ・ド・フランスに保管されていたモース関連の一次資料）の調査を行なった。その結果、膨大な量に上る草稿、ゲラ刷りやノート、書簡などが所蔵されていることを確認し、その一部に関して分析を試みた。

社会学年報学派の活動の時代的背景に関しては、Philippe Besnard, *Etudes durkheimiennes* (2003)、Frederico Rosa, *L'âge d'or du totémisme* (2003)やRobert Alan Johnes, *The Secret of Totem: Religion and Society from McLennan to Freud* (2005)等を参照点として分析を進めていたが、2007年11月、Marcel Fournierによって、デュルケームに関する浩瀚で画期的な評伝*Emile Durkheim (1858-1917)*が刊行され、その一部について集約的な検討を試みている。

これらの作業と並行して、社会学年報学派の周辺に位置するレヴィ・ブリュルの著作、とりわけ、1910年刊行の『未開社会の思惟』を集約的に検討し、社会学年報学派による影響ならびに彼自身の独自の宗教研究の意義を探っている。またデュルケーム並びに社会学年報学派の宗教研究を日本に最初に紹介した古野清人の業績の再検討も試みている。その成果の一端は、図書②『宗教学文献事典』のレヴィ・ブリュル『未開社会の思惟』、古野清人『古野清人著作集』などの項目において発表した。

同じく2007年度には、IMECでの調査結果をふまえ、Fonds Maussの大量の一次文献の調査・分析に基づいて、デュルケーム、モースのみならず、ユベール、ロベール・エルツらも含めて、社会学年報学派の宗教研究の全体像を内在的に解明する必要性から、「社会学年報学派の宗教研究に関する体系的研究」という研究課題名で、「研究計画最終年度前年度の応募」として平成20年度科研費に新規応募し、幸いにも採用された。従って2008年度の研究成果は、この新たな課題に対応する

ものとなっている。

(3)2008年度

IMECに赴いてのFonds Maussの調査、とりわけ「供犠論」に関わる草稿、ゲラ刷り等の精査の成果をふまえ、「供犠論」のテキスト、並びに*Lettre à Mauss* (PUF,1998)等に収録されているモースとユベール宛のデュルケームの書簡の精査に基づき、FournierやBesnardらの二次文献も援用しつつ、この論文の「困難で混沌とした」生成過程——Besnardの表現による——を詳細に分析・検討した。

この結果、

①1899年の『社会学年報』第2巻に掲載された「供犠の本質と機能に関する試論」の生成には、共著者としてのユベールとモースのみならず、いわば「隠された共同作業」としてデュルケームが積極的に関与しており、とくにその結論部分には、デュルケームの直接的な関与が読み取れること、

②デュルケームはこの作業のなかで、宗教現象としての供犠そのものの解明に導かれ、これに没頭する過程で、儀礼が社会活性化の機能をもつという新たな視点にたどり着いたこと、またその背景には、個人に対する強制的な側面においてのみ社会をとらえる彼の従来の社会観の転換が看取されること、

③1897年の『自殺論』刊行以後、デュルケームの宗教研究を規定していた進化主義的な発生論的観点が後退し、三者の共同作業の過程で、おそらくはユベールとモースの主導により、共時的、総体的な視点が、社会学年報学派の宗教研究の共通の方向性として確立されたこと、

以上の3点が明らかとなった。「供犠論」の生成過程は、社会学年報学派としての宗教研究の出発点であるにとどまらず、発生論的観点に依拠していたデュルケームによる従来の宗教研究の転回点でもあった。この成果の一端は、雑誌論文①「ユベール・モース「供犠の本質と機能に関する試論」の生成——社会学年報学派の宗教学思想1——」において発表している。

本研究においては、社会学年報学派の宗教研究における共通の枠組み（表象、儀礼、社会組織、宗教体系の4つのカテゴリー、並びにその前提となる共時的・総体的視点）が明らかとなり、さらに、そのような枠組みが形成される始点に、「供犠論」の生成にまつわるデュルケーム・ユベール・モース三者の錯綜した共同作業が位置していたことが確認された。社会学年報学派の共同作業に着目することによって、従来の個別的なデュルケーム

研究やモース研究に新たな光を投げかける、独自の成果を上げることができた、と自負している。

今後は、学派におけるトーテミズム像の変遷、さらに呪術論とマナイズムをめぐる議論の展開に着目しつつ、社会学年報学派による宗教研究の全体像の解明に邁進したいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 山崎亮、ユベール・モース「供犠の本質と機能に関する試論」の生成——社会学年報学派の宗教学思想1——、社会文化論集：島根大学法文学部社会文化学科紀要、5、pp.85-97、2009、無
<http://ap09.lib.shimane-u.ac.jp/article.php?flag=j&output=table&arid=6869>
- ② 山崎亮、宗教民俗とコミュニケーション——講演「日本の神々：出雲地方の神話と祭礼」をめぐる——、島根大学教育学部紀要、42別冊、pp.55-70、2009、無
<http://ap09.lib.shimane-u.ac.jp/article.php?flag=j&output=table&arid=6859>
- ③ 山崎亮、「福祉文化」考——『福祉文化』の終刊に寄せて——、島根大学社会福祉論集、2、pp.36-46、2008、無
<http://ap09.lib.shimane-u.ac.jp/article.php?flag=j&output=table&arid=6540>
- ④ 山崎亮、社会学年報学派の宗教学思想・序説——『社会学年報』宗教社会学セクションの構成を中心に——、島根大学教育学部紀要、40、pp.92-108、2006、無
<http://ap09.lib.shimane-u.ac.jp/article.php?flag=j&output=table&arid=6078>

[学会発表] (計7件)

- ① 山崎亮、「神社書上帳」にみる石見地方の森神信仰、第9回山陰宗門改帳研究会、2008.6.28、島根大学法文学部
- ② 山崎亮、宗教民俗をめぐる異文化間コミュニケーションと世代間コミュニケーション、第4回「世代間コミュニケーションと教育」研究会、2008.3.13、島根大学教育学部
- ③ YAMAZAKI MAKOTO, La relativisation de la notion de mort : la mort cérébrale et la transplantation d'organes au Japon, Séminaire bioéthique et société ; Autour du don d'organe, 2007.12.6, Centre Européen d'Enseignement et de Recherche en Etique, Strasbourg.

- ④ YAMAZAKI MAKOTO, Les divinités du japon : les mythes et les cérémonies de la region d'Izumo, Conférence organisé par Le Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace et le Département d'Etudes Japonaises de l'Université Marc Bloch de Strasbourg, 2007.5.10, Colmar.
- ⑤ 山崎亮、ユベール・モース供犠論の生成、日本宗教学会第65回学術大会、2006.9.18、東北大学
- ⑥ 山崎亮、社会学年報学派の宗教学思想・序説、印度学宗教学会第49回学術大会、2006.6.10、大正大学
- ⑦ 山崎亮、墓上施設の現在——隠岐・対馬・壹岐におけるスヤをめぐる——、第2回山陰宗門改帳研究会、2005.7.15、島根大学法文学部

[図書] (計2件)

- ① 相良英輔・榎原茂・山崎亮他、清文堂、『たたら製鉄・石見銀山と地域社会——近世近代の中国地方——』（明治初期旧石見銀山領における森神信仰——数量的把握の試み——）、2008、556p (251-271)
- ② 島藺進・深澤英隆・山崎亮他、弘文堂、『宗教学文献事典』（コムストック『宗教』、シュタイナー『タブー』、デュルケム『宗教生活の原初形態』、『古野清人著作集』、山崎亮『デュルケム宗教学思想の研究』、レヴィ・ブリュル『未開社会の思惟』）、2007、557p (150, 183, 252, 336-337, 417, 447)

6. 研究組織

(1)研究代表者

山崎 亮 (YAMAZAKI MAKOTO)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：40191275

